

女子大学としての教育を発展させるためのリベラル・アーツの伝統と実学の充実

湊 晶子 氏 東京女子大学学長

リベラル・アーツの伝統を有する東京女子大学は、実学的な教育についてはどのように取り組んでいるのか。共学志向の中、女子大学であり続けることの意義と併せて、ご自身が卒業生のお一人でもある学長・湊晶子氏にうかがった。

女子大であることの意義

はじめに、東京女子大学の教育理念についてお聞かせください。

湊 新渡戸稲造先生を初代学長として、安井てつ先生を学監に迎えて、北米のプロテスタント諸教派の援助の下、1918年に創立した本学には、三つの教育理念があります。

一つ目は、キリスト教の精神を基盤にすることです。クリスチャンを養成しようというのではなく、たとえ自分を犠牲にしても、社会のため、人のために貢献しようとするキリストの精神に則って教育を進めるということです。私たちの大学の校章は二つのSを十字に組み合わせたかたちですが、それは“Service and Sacrifice”の頭文字であり、「奉仕」と「犠牲」の精神を持つ人格を育てるとの理念を表すものです。

二つ目の理念は、リベラル・アーツ教

育です。私は1951年、戦後の混乱の時期に、一人の学生としてこの大学に入りました。最初に開いたテキストは『Our College』という、本学の設立者の一人であるA.K.ライシャワー先生が書かれたものですが、その1行目に“ Our college is a liberal arts college ”とありました。“ liberal arts ”とは何だろう。受験英語で習わなかった単語だったこともあって、その言葉に強い印象を受けました。その瞬間から、リベラル・アーツの追求が私の生涯のテーマになったといっても過言ではありません。

遠くギリシャ・ローマに起源を持ち、欧米の大学に受け継がれた教育であり、専門家の育成ではなく、幅広い教養を持った人間の育成を目指す教育、それがリ



ベラル・アーツです。

リベラル・アーツは創立以来の伝統ということですね。

漢 新渡戸先生は、知識 (Knowledge) より叡智 (Wisdom) が大切である、とおっしゃっています。また『内観外望』という書物で「学問の第一の目的は人の心をリベライズするといふこと、エマンシペイトすることである」と述べています。軍国主義教育を受けた私の心をまさに「自由に」して、既成概念から「解放」してくれたのが東京女子大学の教育でした。

三つ目は、女子教育です。私としてはたとえ最後の二校になったとしても、東京女子大学はあくまでも女子大学でありたいと考えています。

女子大学であることの意義についてお聞きしたいと思います。

漢 いくつかありますが、私にとって最大の理由は、女性としての人生のモデルに出会えるということです。私がこの大学に入った1951年という年は、日本で女性が参政権を得てから5年しか経っておらず、男尊女卑の風潮がまだ色濃く残っていました。そんな時代に、この大学には、颯爽と風を切るようにキャンパスを闊歩する知的で優しさのある外国人の女性教師の姿があったのです。自信に溢れ、生き活きとした彼女たちに触れるだけで、この大学に入った甲斐があると感じました。あのような女性になりたい。そういうキャリアモデルに出会えることは人生で大きな意味があります。それはよい意味のショックであり、人生を切り拓くチャンスでもあります。そして、それを与えられるのが女子大学です。

第二に、大学にいる18歳から22歳は人生で最も異性を意識する時代だと思いますが、同時に人生の土台をつくる時期でもあり、このときどう過ごすかで、そ

の後の人生が大きく変わってきます。その時期に、ボーイフレンドやお洒落に気を散らさず、勉強に没頭できるひとつの空間があることはとても大切なことだということです。

第三に、女性のリーダーシップが育つことです。共学の学校ですと、何をすることにしても、たいてい男性がリーダーになってしまいますから、どうしてもそれが育ちにくい。米国でも、ヒラリー・クリントンさんなど、リーダーシップを発揮されている女性の多くが女子大学で学ばれています。

東京女子大学は、そのような理念の下に成果を上げられてきたわけですね。

漢 2003年度の文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」で、本学の教育が採択されました。「女性学・ジェンダー的視点に立つ教育展開-[女性の自己確立とキャリア探求]の基礎をつくるリベラル・アーツ教育」という名称で、過去40年間の本学の教育をさかのぼって分析して、卒業生がさまざまな分野で活躍していることなども含めてプレゼンテーションしたものです。その採択理由に「女性の自己確立が多くの卒業生に見られる」とありましたが、東京女子大学の教育は86年の歴史の中で積み上げられてきたものです。私は今後とも、「女性にとってキャリアとは何か」を明確に打ち出し、また社会にアピールしながら、学生を育てていくことに力を注いでまいりたいと思います。

リベラル・アーツと実学

キャリア形成に役立つ教育という点では、どのようなことをお考えですか。

漢 そもそも「キャリア」という言葉の定義ですが、「職業」という言葉は資本主

義経済とともに定着した言葉です。英語では“calling”です。“calling”とは宗教改革時代の言葉であり、もとは「召命」という意味です。言葉の使い方からして混乱があるように感じられますが、キャリアとは何か、それを再考すべき時期にきているのではないのでしょうか。女性が男性と同じパターンで職業に従事し続けられれば、いっそう少子化が進むことは避けられないでしょう。今や結婚したら損だと考える若い女性が圧倒的に多くなっています。「せっかく猛勉強して大学に入ったのだから、社会に出て活躍したい」と。しかし、職業に就いて給料をいただくことだけが女性のキャリアではありません。結婚して、子育てすることも同じように重い労働“calling”であり、そこに価値の上下はありません。それが社会の中でよく認識されていないように思われます。男性の頭も変えていかなければならぬし、女性の頭も変えていかなければならない。私はそれを発信するのが、女子大学の大きな使命のひとつだと思っています。

もちろん、「女性は家庭に収まるべき」などと言うつもりはありません。ただ、女性に向く職業はあると思います。それは自分で積み上げた経験を土台にしながら、その成果を社会に還元できるようなものであり、例えば私のような学問の仕事です。私は夫を事故で亡くしてから、一人で3人の子どもを育てながら仕事を続けました。子どもに手がかかる10年間くらいは、外でする仕事を少し減らして、自宅をベースにして資料収集などに努めました。自ら蓄積の時代と位置付け、いざとなれば、いくつでも論文が書ける引き出しをつくろう。そのような目標を持って過ごしたのです。学問のほか、弁護士なども適しているでしょう。子育てや家族

大学の社会的責任

~ 21世紀の世界・日本をリードする人材養成という時代の要請に込めているか? ~

に関係するさまざまな問題は、自ら経験しなければ分からないものです。たとえ一時期仕事を減らしたとしても、後々その経験は有効に活かせるはずです。子育ての期間、次のステップのため、問題意識を持って本を読み、経験したことを記録しておく。それが必ず役に立つでしょう。そのようなことを次世代の女性たちに伝えたいと思います。何しろ私の時代は、雇用法も育児休暇もありません。子どもを預けて働けば、バッシングされる時代でした。その中で、ここで私が負けたら、後に続く働く女性たちの将来は拓けない、と頑張ってきました。今、私の子どもたちは弁護士、税理士、音楽家になり、社会に還元しています。私は自分が生きてきた道で学んだことを、女子大の学長というポストにあるときに発信する責任があると思っています。

自立するためには大学でどのようなことを学ぶべきであるとお考えですか。

濱 私は自立には4種類あると思っています。経済的自立、生活自立、社会的自立、精神的自立です。一般に自立というと、たいてい経済的自立を指すと思いますが、四つの自立のうちで、最も難しいのが精神的自立だと思っています。どのような苦境の中に置かれても精神的に自立する強さがなければ、働くこともできません。どのような職業に就くにしても大切なのは人格形成であり、自らの人生について明確な目的意識をつかむ場が大学だと思っています。

縦割り型の教育ですと、本来のリベラル・アーツ教育が難しいのでは。

濱 私は学長に就任してすぐに、学部や学科の壁を低くするため、カリキュラムや単位制度を一新して、他学部や他学科の講義を履修しやすくしました。ま

た、それまでは教養の部分が学部ごとに分かれていましたが、教員が重複することもあり、全学的なプロジェクトとするため土台を一本化しました。

実学についてはどのような取り組みをされていますか。

濱 もちろん実学は大切です。本学は文理学部と現代文化学部という二つの学部がありますが、両方とも実学部門を重視しており、情報や外国語などの教育に力を入れています。また、一つの大学の内部であらゆる学問を網羅するのは不可能ですから、外部の機関との連携によって教育の内容を充実させることも進めています。私は学長に就任すると早々、大学院については国際基督教大学大学院と、学部については東京外国語大学との間で単位互換の協定を結びました。自分たちだけでも、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語、朝鮮語くらいまではカバーできますが、その他の言語となると難しいわけです。お互いにあるものを提供し合おうということで、交流はかなり充実したものになりつつあります。

近隣の大学との単位互換も進められているようですね。

濱 亜細亜大学、日本獣医畜産大学、武蔵野大学、成蹊大学、東京女子大学の「武蔵野地域五大学」の単位互換制度もスムーズに進みました。交流によって刺激を受けますし、他大学にはこちらにない科目もたくさんあります。さらに英語の講座ではプリティッシュカウンセルにご協力いただいています。これも大変好評で、卒業生や近隣の方々にも利用していただいています。

教育についてはその他、どのような改革をされていますか。

濱 本学の英語名は“Tokyo Woman's

Christian University”で、“Woman”と単数系になっていますが、そこには4,300人の生徒一人ひとりを大切に育てたいという思いが込められています。その理念に沿うものとして、アドバイザー制度を設けました。すべての先生方に個々の学生と交流して、履修計画や学生生活について相談に乗っていただくもので、そのための時間であるオフィスアワーを週2コマ以上を用意していただいています。

私自身が学長として取り組んでいることとしては、学長特別教養講座があります。その講座では、学生たちにこの方のお話を聞かせてあげたい、あの方と接してほしい、と思う方々をお招きしています。昨年は「国際化社会と教養教育」というテーマでシンポジウムを開催しまして、東京大学教養学部長の浅島誠先生や国際基督教大学学長の絹川正吉先生などに講演していただきました。単位にはならないのですが、大変な盛況で、500人も集まりました。これは全学的に精神性を高め、視野を拡大するための試みです。18歳から22歳は人格が形成される大切な時期ですから、そのような機会により刺激を受けてほしいと思います。

また、学長として暖めている案に、学長教養講座の一環として実学的なことを扱うという試みがあります。1年生から4年生までを対象に、講義の前半は、女性の生き方についての講義、後半では、さまざまな分野の第一線で活躍されている方にお話していただいて、こんな分野もある、あんな分野もある、そのようなことを学生たちに見せてあげたい。そして、自分の生涯のキャリアにするなら、どのような分野が適しているのか、それを考えてもらいたいと思います。その中に

は、司法試験など国家資格試験を受ける道もあるはずで、ぜひLEC大学との協力関係も検討させていただきたいと思えます。21世紀を生きていくとき、何を身に付けさせてあげればよいのか、それぞれに合ったキャリアを見付けてもらうため、若い人たちのためにできる限りのことをして差し上げたいと思っておりますから。

100年目のコンソシアム

「大学冬の時代」と言われますが、財政の状況はいかがでしょうか。

湊 2004年度の入試でも、10倍近い方に志願していただきました。財政的にも差し迫った大きな問題はありませんが、決して安閑とはしてられません。理事会とともに財政白書を作成していますし、先日も教職員を集めて、財政の現状と問題点についてお話したところです。いかにせん歴史ある学校のため、建物がかなり傷んでいて、その補修の費用の工面が頭の痛いところです。

マネジメント面で改革されたことは。

湊 部署の名称も変え、スムーズにことが運ぶよう事務局の組織改革も行いました。ただ、古い大学ですから、これまで積み上げてきたことはなかなか変わりません。改革しなければならないところはまだまだたくさんあります。私は客員研究員としてハーバード大学にいたことがあります。大きな大学なのですが、事務処理などがスピーディで感心することが多く、そのような点は見習いたいと思いますね。

職員の研修はどのようになされていますか。

湊 財団法人私学研修福祉会の研修や、私立大学等経常費補助金特別補助の海外研修派遣を利用したりしていま



す。時代が大変なスピードで動いていますから、井の中の蛙にならないためには、できるだけ外の風に当たる必要があります。教員も順番にいろいろな研修やセミナーなどに参加していただいています。

最後に、今後の抱負についてお聞かせください。

湊 世界には、今なお性差別が残る国が少なくありません。日本にしても、明治時代にミッションスクールで女性の自立を学ぶことから始まり、今日があるわけですが、世界には女性の教育について取り組まなければならないことがまだまだたくさんあります。そのような思いから、2002年に、日本女子大学、津田塾大学、お茶の水女子大学、奈良女子大学、東京女子大学の5女子大学で、外務省やJICA(国際協力事業団)とともに、アフガニスタン復興支援として、女子教育支援コンソシアムを立ち上げました。その立ち上げのとき、5人の学長が集まったのですが、全員、各校の卒業生でした。新渡戸先生は100年前に『人生雑感』という本で「婦人をして真の位置を獲得せしむるために百年間の準備が必要である」と書かれていますが、ちょうど一世紀

を経て、5女子大学によるコンソシアムをそれぞれの卒業生たちで立ち上げることができたことに、深い感慨を覚えました。今後とも、いかに女子大学が生き残るか、そのような消極的な発想は持ちたくありません。冷静な判断力と決断力、実行力を兼ね備え、社会の中で責任ある行動をとれる女性、しかも他者との違いを受容できる優しさを備えた女性を育てていきたいと思えます。

東京女子大学学長

湊 晶子(みなとあきこ)

1932年生まれ。1955年東京女子大学文学部社会科学科卒業後、フルブライト奨学生としてホイートン大学大学院を修了、神学修士を取得。ハーバード大学客員研究員、東京基督教大学教授、東京女子大学教授を歴任。東京基督教大学名誉教授。専門分野は初期キリスト教史と女性史。長年、ワールド・ビジョン・ジャパン(NGO)理事として開発途上国の女子教育支援活動に従事。2002年より現職。著書に、『キリスト者と国家』、『女性のほんとうのひとり立ち』(いのちのことは社・1984)、『現代を生かす 新渡戸稲造と妻メリー』(近刊)などがある。

読者の皆様のご意見・ご感想をお寄せください。

h-bunka@lec-jp.com

大学の社会的責任

~21世紀の世界・日本をリードする人材養成という時代の要請に応えているか?~

財団法人私学研修福祉会：私立学校教職員の研修と福祉を図ることを目的として、昭和31年に設立された組織。私学教職員の資質向上を図るための各種の研修事業を行っている。